

コロンブスの卵

福島 直（名誉教授）

私たちの研究では、ちょっとしたことに気がついたおかげで大きな成果が生れることが多い。一見難解そうに見える幾何学の証明問題でも、出題図面中に一本の補助線を書き入れると容易に解決できる場合が多いことに似ている。大学における研究成果は、その殆んどが当事者たちの“コロンブスの卵”的発想または発見にもとづくと言っても過言ではあるまい。学会席上でそのような研究成果を発表して、まわりの人達から「実にうまいところに気がついたものですね」とほめられると、内心では嬉しくても「こんなことは“コロンブスの卵”みたいなものです」と謙遜してみせることもあるでしょう。

数年前のことですが、この“コロンブスの卵”という便利な慣用語が英語を母国語とする人達には全く通用しないことを、私は身をもって体験したことがある。そのとき、「“コロンブスの卵”とはどんな意味ですか」との質問に答えて、私は乏しい英語の語彙を総動員し、冷汗をかきながら手まねをまじえて、ともかく一応その由来が含まれている物語の概要を話した。すると、「あなたのお話はよくわかりました。私も小さい頃どこかでそのような話を聞いた記憶があります。ところでそのようなお話から“コロンブスの卵”がどんな意味を持つ慣用語になったのでしょうか。そこが私にはまだわからないのです」と再度の質問を受ける破目になった。あとで日米口語辞典を引いてみたら、*deceptively easy* とでも言うのがよかろうと書いてあった。

その時以来、私は“コロンブスの卵”という表現が世界のどの国々で通用し、どの国々では通用しないかを調べてみたくなりました。今までに知り得たところでは、スペインは勿論のこと、ヨー

ロッパ大陸ではポルトガル・フランス・イタリア・ドイツ・デンマーク・ノルウェー・スウェーデン・フィンランドの諸国には、それぞれ各国語で“コロンブスの卵”という表現が通用していますが、ロシア語にはないようです。東欧圏諸国に対しては未調査です。

先月フランスのツールーズで開かれた国際会議のときに、米国の H. F. 博士（International Biosphere-Geosphere Project の提案者）が私に「6年後の1992年は、コロンブスが米大陸を発見してから500年目にあたる。その有意義な年に応じたような国際的地球物理学関係事業を実施するのが適当であるかについて目下考慮中です」と語ってくれた。私はこの機をのがさず、「ところであなたは“コロンブスの卵”という表現が西欧諸国や日本では広く通用していることをご存じですか？」と聞きましたら、同博士からの返事は私が予想していた通り、「そんなことは始めて聞きました。“コロンブスの卵”とは何を意味するのですか、早速教えて下さい」でした。

私自身の勝手な希望をいえば、米大陸発見500年を機に、米語および英語で *Columbus' egg*（あるいは *egg of Columbus* というべきかもしれませんが）という語を西欧大陸やわが国で通じているような意味を持つ *idiom* にしてもらいたいと思っています。非英語国民にとっては、自国語からの直訳で通じるような *idiom* が一つでもふえることは好ましいことでしょう。国際社会・学会で言葉の上での有利さを満喫している英語国民は非英語国民に対してこの程度の思いやりぐらい示してあげるべきだと私は日頃思っています。